

インタープリVENT 幹事会・理事会報告

丸井 英明 まるい ひであき
インタープリVENT理事・学術委員



砂防カレンダーの由来と内容を紹介する池谷副会長

1. はじめに

国際防災学会インタープリVENT本部の幹事会、理事会が2008年10月16日、17日にかけて、本部が置かれているオーストリア南部ケルンテン州のクラゲンフルトにおいて開催された。さらに、18日には学術委員会がスロヴェニアの首都リュブリャナで開催された。今回の本部会議の開催に併せて、当初はインタープリVENT設立40周年の記念行事においてパネルディスカッションが設定されており、日本を代表して池谷副会長が、インタープリVENTに日本が果たしてきた役割に関して発言される予定であった。しかしながら、州知事のイェルク・ハイダー氏が交通事故により10月11日に突然死去されたことを受け、同州内では氏の逝去を悼み一週間の間一切の公的行事が中止された。そのため、インタープリVENT40周年記念行事も中止されるに至った。改めて来年3月の総会開催時に行われる予定である。

2. 幹事会

10月16日に開催された幹事会は正副会長、事務局長を中心とする役員会であり、翌日の理事会に先立って今後の方針の骨子を議論する会議である。今回の中心議題は本年5月にフォアアルベルク州のドルンビルンで開催されたインタープリVENT第11回大会の総括であった。ローナー会長から概要説明が行われ、324名を数える参加者による会議は成功裏に運営され、内容的にも満足いくものであったとの評価がなされた。一方で、5日間という会期は長すぎて全期間の出席は困難であるという意見に関して議論がなされた。大会への参加者は大学、研究所等の研

究者よりも行政組織の技術者が多数を占めていることから、より参加しやすくするにはどうすればよいか検討がなされた。池谷副会長は、大会期間中における砂防行政官サミットの重要性を指摘し、そのための十分な時間を他のセッションと重複しないように確保することを提起された。幹事会の大勢としては、大会中の核となる発表期間として週の初めの連続した3日間を確保し、フィールド・エクスカージョンをそれ以前あるいは以後とし、サミットを追加する、という方針が提示された。そして、翌日の理事会や翌々日の学術委員会で意見の提示を求め議論を深めたうえで、さらに検討を加え次回の会議で結論を出すこととなった。次の議事は、インタープリVENTの最近の状況報告であった。コボルチュニク事務局長からホームページがドイツ語、英語、イタリア語、フランス語の4ヶ国語で記載され、またこれまでの大会のプロシーディングスに掲載された全ての論文をウェブサイトに掲載し、検索可能としていることが報告された。さらに事務局では、賛助会員のカテゴリーの導入、すなわち市町村や企業を対象として、投票権がない代わりに低額の会費の賛助会員を増やすという案を検討している旨の報告があった。その他に研究活動として、気候変動に伴う災害危険度の変化に関連して、アルプス全域でモニタリングを実施することを包含した、総合的なリスクマネジメントを目標とする”AdaptAlp”というプロジェクトに取り組むことが報告された。

3. 理事会

10月17日には理事会が開催され、その主要な議事は5月にドルンビルンで開催された第11回大会の総括であった。

大会実行委員長であるフォアアルベルク州砂防及び雪崩防止局のライテラー局長並びに学術委員長であるリュブリャナ大学ミコシュ教授からの総括報告に引き続き、会期短縮案に関する論議が行われた。短期間の参加を認める案や平行セッションの開催等の意見も出される反面、他方では開催形態を維持するべき、すなわちインタープリVENTの本質は様々な分野の専門家が一同に会するという学際性にある点を強調する意見も提示された。

ホームページが4ヶ国語で記載されていることに関連し、異なる言語間で専門的概念や用語を的確に翻訳することの困難さに関する指摘がなされた。さらには、翻訳以前の問題として防災分野における種々の概念の定義を統一することの困難性に関する指摘もなされた。

その他の項目においては、ローナー会長から特に池谷副会長から寄贈された「砂防カレンダー」が披露され、要請を受け池谷副会長が砂防カレンダーの由来と内容について紹介された。会長は防災に関する意識の昂揚に対して有効であろうという感想を述べられた。またPRの一手段として、参加した各国の代表も興味を示していた。その他、10月末にミュンヘンで開催が予定されている水に関する会議の紹介や、台湾での環太平洋インタープリVENT会議の準備状況に関する報告等が行われた。

最後にローナー会長から、今回ハイダー州知事の事故死によって、インタープリVENT設立40周年記念行事が直前になって中止されたことに関する御詫びの言葉が述べられ、2009年3月27日の年次総会開催にあわせて改めて記念行事を行う旨説明があった。